

5. A Social Route from Reasoning to Representing

I. Background [前回]

II. Analysis

1. Representation and Communication

2. De dicto and De re

3. Undertaking and Attributing

[以上今回]

4. Ascribing

5. Substitutional Commitments

III. Conclusion

II. 分析

1. 表象 Representation とコミュニケーション

1

・命題的内容を把握すること：know-how=理由を与え、理由を尋ねるゲームの実践的な熟達 mastery

何が何の理由であるのかいうことができること

よい理由と悪い理由を区別できること

→このようなゲームをプレイすること=様々な対話者 interlocutors が何にコミットし、何に資格づけられて entitled いるのかについてスコアをつけること to keep score

・言語行為あるいは信念の内容を理解すること：言語行為の遂行 performance やその信念の獲得 acquisition に適切な実践的意義を認めること

=様々なコンテキストにおいてどのようにそれがスコアを変えるであろうかを知ること

=>意味論的、推論的關係はこの種の pragmatic scorekeeping に関して理解されるべき。

ある文によって表現された主張が、他の文によって表現された主張を含んでいると受け取るということは

一方にコミットする人を、それによって他方にコミットしているものとして扱うということ

しかし、

討議実践は間内容的 intercontent 関係と間人格的 interpersonal 関係をどちらも含む

主張：

前提や結論という推論的役割を果たす命題的内容の表象的側面は、理由を伝達すること communicating、他者によって提起された理由の意義を査定すること assessing という社会的あるいは対話的的局面に関して理解されるべき。

2

特に〔種別的に specifically〕表象的な語彙を用いずに、社会的実践が、推論的に分節化された意義を遂行 performances に与える資格を持つ十分な条件、つまり、〔表象的語彙なしに〕他のものの理由として役立ちうる主張、そしてそれに対して理由が求められ得る主張をなすという実践であるということの、十分条件を与えることができる

→コミットメントと資格付けにおけるスコアキープとしての討議実践モデル

ブランダムが示したいこと：

いかにして、主張の推論的内容の暗黙の表象的側面が、社会的観点における理性の生産者と消費者の差異から生じるのか？

目的：非表象的術語で、明示的に表象的な語彙の使用によって表現されるものを説明すること

3

二つの quick points から始める

・クワイン「経験主義の二つのドグマ」

意味 meaning でなく指示 reference を意味論の中心概念とする

<意味は少なくとも推論的役割を決定し determine なければならないから

→意味の単位は、単に単独の文ではなく、理論全体であるべき。(ホーリズム)

→この説明では、2人の対話者が異なった信念を持っていたら、彼らは彼らが発する文で違うことを意味していることになる。

⇒この説明では、どのようにしてコミュニケーションの可能性が意味を共有するという事柄として理解可能なものとされうるのかが明らかでない。

⇒注意が指示に向けられればこの困難は消える。

例：ゾロアスター教徒は、その人の相互的コミットメントの違いのために sun という語で違うものを意味しているかもしれない。しかし、その者はまだ同じものについて語っていることもありうる。

=>人が何について語っているかを語ることは、全体論的な帰結とともに意味の理論によって引き起こされた心配を指し示して address いる。？

関心は、コミュニケーションの可能性→指示と表象

4

ブランドムの主張：

人々が何について語ったり考えたりしているのかの assessment は、（それについて彼らが何を話しているのかでなく）、コミュニケーションの本質的に社会的な文脈の特徴である。

表象についての語りは、

<ただ仮説としてにすぎないとしても、ある他者の判断を理由として、われわれ自身の推論における前提として、用いることによってコミュニケーションを確保するとは何であるか>、

<われわれ自身の相互的なコミットメントのコンテキストにおける彼らの判断の意味を検討する assess とは何であるのか>

についての語りである。 ??

例：

知識の帰属について、スコアキーパーは三つの種類の実践的態度を採用しなければならない。

(JTB を敷衍)

1. スコアキーパーは推論的に分節化された、したがって命題として内容を持つ コミットメント を帰属 attribute させなければならない。(知識の信念条件に対応)
2. スコアキーパーは一種の推論的 entitlement をそのコミットメントに帰属させなければならない。(知識の正当化 justification 条件に対応)
3. スコアキーパー自身が知識所持候補者 knower candidate に帰されたのと同じコミットメントを引き受け undertake なければならない。(真理条件に対応)

5

コミットメントを引き受けるということは、ある主張に関してある特定の規範的立場を採用するということ

真理を特性と見る古典的形而上学：コミットメントを①帰属させることと②引き受けることあるいは認めること（規範的な地位を設立する義務論的实践態度の二つの根本的な社会的特色

flavors) を間違っ理解している。

＝第三の条件を最初の二つの条件と同化させている。

規範的地位を他のものに帰属させることとその地位を自分自身で引き受けること・採用することの違いを理解することが重要：社会的パースペクティブの違い

社会的なパースペクティブの違いを表現するものとしての、この真理主張？の観念はいかに表象に拡張されうるのか？

2. De dicto and De re

1.

命題的態度の de re ascriptions: 自然言語の最も重要な prime、明示的に表象的な発話 locution
Talk of... / a belief about... と the pen of my aunt/weighing about five pounds の違い

前者 intentional directedness of thought and talk = われわれがそれについて語っているもの / 考えているもの

ブランドムの戦略:

<表現が命題的態度の de re 帰属 ascription と見なされる qualify ためには、その表現はいかにして用いられなければならないのか>を問うことで、

<表象的語彙によって理解されていることをいかに理解するのか (それを理解する仕方) > という問いに取り組む。

→表象的語彙は何を明示化しているのか / われわれがそれについて語り考えていることについて語り考えているときには、われわれは何を行って doing いるのか

＝プラグマティズム的観点から、志向性一般を理解しようとするための戦略

2.

命題的態度帰属 propositional attitude ascriptions の伝統的な二つの読み方

・ ascriptions de dicto: 語られていること dictum あるいは、いうことに対する信頼 belief in

・ ascription de re: 何らかの res あるいはものについての信念 belief about

例:

合衆国の大統領は 2020 年までには黒人になっているだろう。

① de dicto 読み方: 「現在の合衆国大統領が黒人である」という文は 2020 年までに真になっているだろう。

②de re 読み方：合衆国の現在の大統領（クリントン）は2020年までに黒人になっているだろう

この違いはスコープ scope の違い

②確定記述が取り上げている人を決定すること

①時間操作子を適用し、文全体の評価時間を前方へ動かすこと

という操作を適用することのできる二つの可能な異なった秩序 orders の違いを表現するもの＝スコープ

3. もう少し深く検討

例2

ヘンリー・アダムズは避雷針の発明者は避雷針を発明しなかったと信じている (Henry Adams believed the inventor of the lightning rod did not invent the lightning rod.)

de dicto :

ヘンリー・アダムズは避雷針の発明者が避雷針を発明しなかったということ that を信じている。

→ありそうにない

de re :

ヘンリー・アダムズは、避雷針の発明者について of 彼が避雷針を発明しなかったということ that を信じている

→という主張が真であることはあり得る

避雷針の発明者は二重焦点めがねの発明者であるので（つまり Benjamin Franklin）後者の主張は真であり得る。もしヘンリー・アダムズが de dicto に次のように考えられる be ascribed 信念を持っていれば

ヘンリー・アダムズは二重焦点めがねの発明者が避雷針を発明しなかったということ that を信じている。

4

クワイン

この二つの ascription の間の差異

文法的差異：その中に登場する単称名の代入（置換 substitution）の適切さ

de re（of 操作子のスコープ）：指示的に透明な使用 referentially transparent uses（クワインの用語法）／salva veritate、全 ascription の真理値を変えずに相互置換可能

de dicto（that 操作子のスコープ）：全 ascription の真理値を変えうる

構文論的差異：

単称名を that 節から export することによって de dicto → de re

S believes that $\phi(t)$: de dicto

→

S believes **of t** that $\phi(it)$: de re

5

クワインの重要な主張：de re/de dicto の差異は共指示表現(coreferential expressions)の代入（置換）が許される状況にある。

クワインの問題点：無関係な考察によってこれが曖昧になっている。

1. 単称名は必要でないとし、量化表現を指示コミットメントの純正な場と考える
→ 量化された ascription だけを見、議論が存在的コミットメントの問題に巻き込まれ、いつ「輸出」が正当であるのかということについての憂慮にそらされている
2. 認識的に強い de re ascription を優先し、日常的な de re ascription を無視している。

認識的に強い epistemically strong de re ascription：優先された認識上の関係を、それについて語られあるいは考えられている対象に帰する

・この迂回は指示の振る舞い the behavior of demonstratives の特殊な特徴をわれわれが評価するのに実りのある結果をもたらした（特に様相の文脈において in modal contexts）

・しかし、aboutness 一般の理解の観点からは、迂回であり、邪魔なものである。

6

重要なのは、われわれが日々の生活でわれわれが何について of or about 語り考えているのかを表現するのに用いるのは、de re propositional attitude-ascribing locutions であること

命題的内容の表象的側面を理解するには：この根本的な種類の表象的発話によって何が表現されているのかを問う：

「われわれが誰かが何について語りあるいは考えているのかということについて主張をなすときわれわれは何をしているのか？」

→表象的関係を非表象的用語で理解しようとする方法

3. 採用することと帰すること Undertaking and Ascription

1

この章の残りでは de re ascription の表出的役割について扱う←ブランドム独自の用語法によって

主張すること（したがって最終的には判断すること）：その推論的な文節化のために命題的内容を持つコミットメントを採用することあるいは認めること acknowledging

課題：

・そのおかげで主張可能な内容がそれゆえ表象的内容でもあるような、推論的分節化についてそれが何であるのかを示すこと

・それは

a. (潜在的な前提と結論である) 命題的内容

から

b. コミュニケーションにおいて相互の理由を与え理由を求めることからなる推論的分節化の社会的な側面

を経て

c. 対象について語ることとしての、そして対象について、どのようにそれらが存在するのかについてということとしての命題

にたどり着くこと。¹

2.

Undertaking:

コミットメントを採用すること：他者がそれを帰属させる attribute ことを適切にするような何かを行うこと

・二つの異なった仕方

①明白な確言でそれを公言する気になる be disposed ことによって、コミットメントを認める

¹ 客観性については次章

こと acknowledge

あるいは

その人の理論的あるいは実践的理由付けにおいて前提としてそれを採用することによってコミットメントを認める

②結果としてコミットメントを採用する：その人が認めることによって含まれている推論的帰結として、つまり結論として、コミットさせられる

これには二つの believe の意味が対応

①本人が自分自身で信じていると受け取っているものだけを信じる。

②その人の信念がその人に何をコミットさせようと、否応なく信じる。

②の例：

私はカントがハーマンに敬意を抱いていたと信じる

&

私はハーマンが the Magus of the North であると信じる

→問いが私に浮かぼうが浮かぶまいが、私がそれを知っていようがまいが、私は実際にカントが the Magus of the North に敬意を抱いていると信じている
なぜなら私自身その主張にコミットしていたから

3.

Attributing beliefs and commitments：スコアキーピングの実践において暗示的である実践的態度。そのなかでのみ何かが主張あるいは判断の意義を持ちうる。

→人がなし得るに過ぎないこと something one can only do

Ascribing beliefs and commitments：暗示的な実践的態度を主張の形式で明示化すること

→それがその人が行っていることであることをいうこと to say that is what one is doing

=実践的義務論的スコアキーピングを命題的内容として、つまり主張内容として表現すること

明示化する語彙のパラディグマ=条件文 the conditional

(明示化する語彙=類/命題的態度-発話帰属?=種)

「信じる」「主張する」といった Ascriptional 語彙は信念的 doxatic コミットメントの帰属を主張可能な内容の形式で明示化する